

太工通信

令和7年度第12号

太工生キッチンカー製作で 地域に貢献



完成したキッチンカーの前で協定書を披露する星野理事長(右から4人目)と穂積市長(同5人目)、製作に携わった太田工業高の生徒や卒業生

キッチンカーはテレビ中継車を改造したもので全長約10メートル。同NPOによると、災害対応のキッチンカーの車体としては国内最大級という。

大型の炊飯器やオーブンを搭載し、1回の調理で400〜450食の温かい食事を用意できる。食材や物資を運搬するための積載場所やリフトも備える。車体後部には一般家庭約10軒分の電力をまかなえる発電機を搭載しており、現地でさまざまな支援が可能という。製作費用は星野理事長の個人負担に加え、卒業生や地元企業からの寄付、クラウドファンディング(CF)で賄った。

星野理事長は、取締役を務める新田製パン(同市本町)の社会貢献活動として、2011年の東日本大震災発生時に宮城県へ1万食の

パンを運ぶなど被災地で支援活動を継続した。

「焼いて時間がたったパンだけでなく、作りたてを提供したい」と思うようになり、キッチンカーの製作を計画。23年11月に母校の太田工業高で行った講演でアイデアを披露したところ、電子機械科が授業の1環として協力を申し出た。

24年に作業を開始。地元企業や専門学校などが物品を無償提供したほか、技術指導に名乗り出るなど協賛者が増えたという。

市役所で開かれた協定締結式で、星野理事長と穂積昌信市長が調印した。星野理事長は「災害はいつ起こるか分からないので、対応力を向上させる」と語った。穂積市長は「社会課題は自治体だけでは解決できない。提携を機に各団体との連携が進めば」と述べた。

製作に携わった生徒や卒業生も同席。今月卒業する3年の須藤諒央さん(18)は「経験したことのない溶接作業もあったが、専門家の指導で形にすることができた」と振り返った。

キッチンカーは夏ごろから本格運用する。平時は防災イベントの啓発事業、移動式の子ども食堂としての活用を計画している。他の災害支援団体と協力し、要請に応じて太田市外の災害現場にも出向く予定。

太田のNPO × 太田工高生徒

最大450食、温かい食事を

被災地に向いて避難所での炊き出しなどの支援活動を行うため、太田市のNPO法人「新田フードサポート」(星野茂理理事長)が太田工業高の生徒らと製作した大型のキッチンカーが完成し、23日に市内で披露された。災害時の運用を視野にNPOと市は同日、協定を締結。星野理事長(37)は「地域の協力で素晴らしいものができた。各地で支援活動に役立てたい」と展望している。

市と協定

災害用キッチンカー製作

2026.3.24 上毛新聞

(正田哲雄)

太工通信

令和7年度第12号

太工生キッチンカー製作で 地域に貢献

キッチンカー
災害に備え

太田市は23日、同市のNPO法人「新田フードサポート」と、災害時の炊き出しに関する協定を結んだ。法人が所有する国内最大級のキッチンカーは太田工業高校の生徒と共同製作した1台で、保健所に登録後、夏の運用開始を目指す。

法人は、東日本大震災や能登半島地震の被災地でパンを提供するなどの支援を行ってきた同市の「新田製パン」の星野茂・取締役統括部長(37)が昨年1月に設立。同社で被災地支援の窓口だった星野さんは、温かくおいしい食事を提供できるキッチンカーを作ろうと法人設立前に中古の放送用中継車を購入した。卒業生でもある星野さんの活動に

NPO法人、太田市と協定 太田工生が車両製作



協定を結んだ穂積市長(左から4人目)と星野さん(同5人目)、キッチンカー製作に携わった太田工業高の生徒と卒業生(23日、太田市で)

も自作だ。完成車は全長10㍎、幅2・5㍎で1度に最大450食分の温かい食事を提供できる。1時間でおにぎり2000個を作る機械もある。

市役所で行われた締結式で、星野さんは「子ども食堂などにも活用し、温かい食事を提供していきたい」と話し、穂積市長は「災害が起きる前に協力体制を作るのは大切。一層連携を進めたい」と述べた。

キッチンカー製作に関わった生徒は2年間で約35人。昨年3月に卒業した3人は法人の活動会員となり、この日の締結式にも出席した。3年須藤諒央さんは「工業高校ならではの活動で立ち会えてよかった。大きな体験だった」と話していた。

賛同した同校では、電子機械科の3年生が2024年4月からキッチンカー製作に取り組んだ。

生徒は塗装から内装の設

備製作まで担当。水を入れるタンクは既製品ではサイズが合わなかったため、生徒たちがステンレスを溶接して手作りした。床や壁面